伊勢物語

特別圖書
へ多12
1979

文庫

岩山殿道堅筆
伊勢物語

一
むかしおとこうゐかうふりしてならの京
かすかの里にしるよしゝてかりにいにけり
そのさとにいとなまめいたる女はらから
すみけりこの男かいまみてけりおもほ
えすふる里にいとはしたなくてありけれは
心ちまとひにけりおとこのきたりけるかり
きぬのすそをきりて哥をかきてやる
その男しのふすりのかりきぬを
なむきたりける

（新古今）かすかのゝ若むらさきのすり衣
しのふのみたれかきりしられす
となんをいつきていひやりけるついてお
もしろきことゝもや思ひけん

（古今）みちのくのしのふもちすりたれゆへに
みたれそめにし我ならなくに
といふ哥の心はへなりむかし人はかく

いちはやきみやひをなむしける
河原左大臣 左大臣源融 寛平七年八月薨七十三
於在中将非業先達如何

二 むかしおとこありけりならの京ははなれこの
京は人の家またさためさりける時に
西の京に女ありけりその女世人にはまされり
けりその人かたちよりは心なむまさりたりける
ひとりのみもあらさりけらしそれをかのまめ
をとこうち物かたらひ
てかへりきていかゝ思ひけむ時はやよひのつい
たち雨そほふるにやりける
おきもせすねもせてよるをあかしては
春の物とてなかめくらしつ

三 昔おとこ有けりけさうしける女のもとにひし
きもといふ物をやるとて
思ひあらはむくらの宿にねもしなむ
ひしきものには袖をしつゝも

二條の后まだきさきにならせ給はざりける
時はたゞ人にておはしましける時の事也
むかしひんがしの五條におほきさいの宮おはし
ましける西の對にすむ人ありける
を本意にはあらで心ざしふかゝりける
人ゆきとぶらひけるをむ月の十日ばかり
のほどにほかにかくれにけりありどころは
聞けど人のいきかよふべき所にもあらざりけれは

猶うしと思ひつゝなむありける
又の年のむ月に梅の花さかりにこぞを
こひていきて立ちて見ゐて見見れどこぞに
似るべくもあらずうちなきてあはらなる
いたじきに月のかたぶくまでふせりて
こぞを思ひいでてよめる

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ
我身ひとつはもとの身にして

とよみて夜のほの〳〵とあくるになく〳〵
かへりにけり

五
むかし男有けり東の五条わたりにいと忍ひて
いきけりみそかなる所なれはかとよりも
えいらてわらはへのふみあけたる
ついひちのくつれよりかよひけり人しけくも
あらねとたひかさなりけれはあるしきゝつけて
そのかよひちによことに人をすゑてまもら
せけれはいけともえあはてかへりけりさてよめる
人しれぬわかかよひちの関守は
よひ〳〵ことにうちもねなゝん
とよめりけれはいといたう心やみけり
あるしゆるしてけり二条の后にしのひてま
いりけるを世のきこえありけれはせうとたちの
まもらせ給ひけるとそ

六
昔男有けり女のえうましかりけるを年をへて

とあるしるしはかうかうて猪のいのちをとて、あるすも
いふて伊勢へまうてけるにおくりはとふ
河とあくいまされて草への庵とそれなり
斎宮のまたは手中にそとなへ物とは書
也もそれ以歌にも書てとれは狩の
所にて志て神は(へ)のせ伊勢のかたの雨も伊
かとふつけ也いふうたうたるくにも女と在
狩の使とのふ事く書ゆとやるといとのく
心くらふみそうてや夜てあかまたも四月祈
ねうりかうま狩のやひくらとくみへうる
あふやむといひきれと神なるさるよりさき
みけ事宮すくに歌てあかゆとにもれはあく
こて女とおもいへるいうてくるまとりにいよ
志るまのあきかわそと人のとゐし心末
斎宮とくさへくきつるまうしよの代
高子 元慶元年正月為中宮 廿六
こまもん二條乃后のいまた女御乃御時ま

仕うまつるやうにてゐ給へりけるをかたちのいと
めでたくおはしければぬすみておひていでたりける
をおほんせうとほり河のおとゞ（昭宣公）たらうくにつね
の大納言またげらうにて内へまいり給ふに
いみじうなく人あるをきゝつけてとゞめて
とりかへし給ふてけりそれをかくおにとはいふ
なりけりまだいとわかうて后のたゞに
おはしける時とや

七
むかし男有けり京にありわびてあづまに
いきけるに伊勢尾張のあはひの海づらをゆくに
浪のいとしろくたつを見て
（後撰）いとゞしくすぎゆく方のこひしきに
うら山しくもかへる浪かな
となむよめりける

八
昔男ありけり京やすみうかりけむあづまのかたに
行て住所もとむとて友とする人ひとりふたりして
ゆきけりしなのゝ国あさまのたけに

烟りのたつを見て

しなのなる浅間のたけにたつけふり
をちこち人の見やはとかめぬ

九 むかし男ありけり其男身をえうなき物に
思ひなして京にはあらしあつまの方に
すむへき国もとめにとてゆきけりもとより友とする
人ひとりふたりしていきけり道しれる人
もなくてまとひいきけりみかはのくにやつ
はしといふ所にいたりぬそこを八橋といひける
は水ゆく河のくもてなれは橋をやつわたせる
によりてなむ八橋といひけるその沢の
ほとりの木のかけにおりゐてかれいひくひけりその沢
にかきつはたいとおもしろくさきたりそれを
見てある人のいはくかきつはたといふ五もし
をくのかみにすへてたひの心をよめと
いひけれはよめる

哥
から衣きつゝなれにし妻しあれは
はる〳〵きぬるたひをしそ思ふ
とよめりけれはみな人かれいひのうへに涙
おとしてほとひにけり
行〳〵てするかの国にいたりぬうつの山に
いたりてわか入らむとする道はいとくらう
ほそきにつたかへてはしけり物心ほそく
すゝろなるめを見る事と思ふに修行者あひ
たりかゝる道はいかてかいまするといふを見れは
見し人なりけり京にその人の御もとに
とてふみかきてつく

哥
するかなるうつの山への現にも
夢にも人にあはぬなりけり
ふしの山を見れはさ月のつこもりに雪いと
しろうふれり

哥
時しらぬ山はふしのねいつとてか

またらに雪のふるらむ
その山はこゝにたとへはひえの山をはたちはかり
かさねあけたらむ
或説云塩尻ハ塩竈といふ物なり其形似此山此物語ニ習故ニ早詞
并連殊信用此説或本ニえけり
ほとしてなりはしほしりのやうになんありける
なほゆき〳〵てむさしの国としもつふさの
先人命紙雖為[illegible]事非早也五ハ月ニ至ヲもそあつらん
此年有尋向人答恨不知之由云々
くにとの中にいとおほきなる河ありそれを
すみた河といふその河のほとりにむれゐて
思ひやれはかきりなくとほくもきにけるかなと
わひあへるにわたしもりはや舟にのれ日もくれぬ
といふにのりてわたらんとするにみな人
物わひしくて京に思ふ人なきにしもあらす
さるをりしもしろき鳥のはしとあしとあかき
しきのおほきさなる水のうへにあそひつゝいをゝくふ
京には見えぬ鳥なれはみな人見しらすわたし
もりにとひけれはこれなん宮こ鳥といふをきゝて

名にしおはゝいさ事とはんみやこ鳥
わか思ふ人はありやなしやと
とよめりけれは舟こそりてなきにけり
むかし男武蔵の国まてまとひありきけり
さてその国なる女をよはひけり父はこと人
にあはせむといひけるを母なむあてなる人に
心つけたりける父はなほ人にて母なん
藤原なりけるさてなむあてなる人にと思ひ
けるこのむこかねによみておこせたりける
住む所なむ入間の郡みよしのゝ里なりける
みよしのゝたのむの雁もひたふるに
君かかたにそよるとなくなる
むこかねかへし
わかゝたによるとなくなるみよしのゝ
たのむの雁をいつかわすれん
となむ人の国にても猶かゝる事なむやま

けりとなむ

十一
むかしおとこあつまへゆきけるに友たちともに
みちよりいひをこせける 俗説
わするなよほとは雲井になりぬとも
そらゆく月のめくりあふまて

十二
昔男有けり人のむすめをぬすみてむさし
野へゐてゆくほとにぬす人なりけれはくにの
かみにからめられにけり女をは草むらの
おきてにけにけりみちくる人この
野はぬす人あなりとて火つけむとす女
わひて
むさし野はけふはなやきそ若草の
ちと カスカノ
つまもこもれり我もこもれり
とよみけるをききて女をはとりてともにゐて
いにけり

十三
むかし武蔵なる男京なる女のもとにきこゆれは

はつかしきこえねはくるしとかきてうは
かきにはむさしあふみとかきておこせて後
おともせすなりにけれは京より女
むさしあふみさすかにかけてたのむには
とはぬもつらしとふもうるさし
とあるを見てなむたへかたき心ちしける
とへはいふとはねはうらむ武蔵あふみ
かゝるおりにや人はしぬらむ

十四
むかし男みちの国にすゝろにゆきいたりにけり
そこなる女京の人はめつらかにやおほえけん
せちに思へる心なんありけるさてかの女
中〳〵に恋にしなすはくはこにそ　桑子　蚕也
なるへかりける玉のをはかり
うたさへそひなひたりけるさすかにあはれと
や思ひけんいきてねにけり夜ふかくいてにけれは
女

夜もあけはきつにはめなてくたかけの　東国ニ明家ツクタト云
またきになきてせなをやりつる　家鶏也
といへるにおとこ京へまかるとて　カ一本
くりはらのあねはの松の人ならは　栗
宮このつとにいさといはましを
といへりけれはよろこほひておもひけらしとそ
いひをりける

昔みちのくにゝてなてふ事なき人のめに
かよひけるにあやしうさやうにてあるへき女と
もあらす見えけれは
しのふ山しのひてかよふ道もかな
人の心のおくも見るへく
女かきりなくめてたしと思へとさる
さかなきえひす心を見てはいかゝはせんは

昔紀有常といふ人ありけり三代のみ
かとにつかうまつりて時にあひけれと後は世かはり

時しる事もなくてよろつ様人のこゝろもありへき
たゆまぬ事のうへにあらはなる事となりて
これもにたまへしく是ても猶もしよからす
の心あるとも仏法の事をこゝろえぬあはれ
さるのみやうくもことに難さへつらにあらはなりて
あるはなれさらてありくあ所の申も思色を
よもつはれさき事にそあらけれとも絶くを
ゆるあはれすも思ふれはまさしれはすゝやさとか
ありける字ましいやしき様人の縁とあはゆゑ申て心
さる夜はちはれりまたりく今はふしまはすとまと
事にも浮にうたあなれともこのせく浮の事々をすに事を
あつきてたくま

手綱ひくあひ見て綱かけ越まさる
いたもて浮は浮ひて何は舟宿り
うつ夜あちこちまた夜なくいまあはれなまし
よ所の物まて申しくりてしあれ

年たにもとをとてよつはへにけるを
いくたひ君をたのみきぬらむ
かくいひやりたりけれは
これやこのあまのは衣むへしこそ
君かみけしとたてまつりけれ
よろこひにたへて又
秋やくる露やまかふとおもふまて
あるはなみたのふるにそ有ける

十七
年比おとつれさりける人のさくらのさかりに
見にきたりけれはあるし
あたなりと名にこそたてれ桜花
年にまれなる人もまちけり
返し
けふこすはあすは雪とそふりなまし
きえすはありとも花と見ましや

十八
むかしなま心ある女ありけり男ちかうあり

うけり女うたよむ人なりけれは心みむとてきくの
花のうつろへるを折て男のもとへやる
紅にゝほふはいつら白雪の
えたもとをゝにふるかとも見ゆ
おとこしらすよみによみける
紅にゝほふかうへの白菊は
おりける人の袖かとも見ゆ
昔男宮つかへしける女の方にこたちなりける
人とあひしりたりける程もなくかれにけり同
所なれは女のめには見ゆる物からおとこは
ある物かとも思ひたらす女
あま雲のよそにも人のなりゆくか
さすかにめには見ゆる物から
とよめりけれはおとこかへし
あま雲のよそにのみしてふる事は
我ゐる山の風はやみなり

とよめりけるは又男ある人となんいひける

むかし男やまとにある女を見てよばひてあひにけりさてほどへて宮づかへする人なりければかへりくる道にやよひばかりにかえでのもみぢのいとおもしろきををりて女のもとに道よりいひやる

君がためたをれる枝は春ながら
かくこそ秋のもみぢしにけれ

とてやりたりければ返事は京にきつきてなんもてきたりける

いつのまにうつろふ色のつきぬらん
君が里には春なかるらし

昔男女いとかしこく思ひかはしてこと心なかりけりさるをいかなる事かありけんいさゝかなる事につけて世中をうしと思ひて出ていなんと思ひてかゝる歌をなんよみて物に書つけける

侍てこれはこの御事といひやられ
世のありさまを人にかたりけれは
かくれ見えしてゐて侍りけるこの女のかなしさ
かれこれの我常にも心をへき事をおもひねと
なからへらくの君もものをいひすれはへく
とりさはしあゆむもわれしいてこみかりと
見き給ひとてとてかりもをおもひしかれ
りつはりて

思ふ事ひとつ世なりけりとわかす月と
あはれなり我やいかにかは
こと侍りしくなりの後まて
人の侍らせしいやすむ世を玉のしり
なりし君のをいひしくてきる
この女いといはしくおもはす人もいてや
あはれむしつれとこそおもふ
今はとて涙の草のゆかりをとゆる

人のこゝろにまかせすもかな
返し
忘草うふとたにきく物ならは
思ひけりとはしりもしなまし
又ゝありしよりけにいひかはしてをとこ
わするらむと思ふこゝろのうたかひに
ありしよりけに物そかなしき
返し
中そらにたちゐる雲のあともなく
身のはかなくも成にけるかな
とはいひけれとをのか世ゝに成にけれはうとく成にけり
むかしはかなくて絶にける中なをや忘
れさりけむ女のもとより
うきなからひとをはえしも忘れねは
かつうらみつゝなをそこひしき
といへりけれはされはよといひてをとこ

あひ見ては心ひとつをかはしまの
水のながれてたえじとぞおもふ
とはいひけれどその夜いにけりいにしへゆくさきの事どもなどいひて
秋の夜の千夜を一夜になずらへて
やちよしねばやあく時のあらむ
返し
あきの夜の千夜をひとよになせりとも
こと葉のこりてとりやなきなむ
いにしへよりもあはれにてなむかよひける

廿三
昔田舎わたらひしける人の子ども井のもとに
いでてあそびけるを大人になりにければ男も
女もはぢかはしてありけれど男はこの女を
こそえめとおもふ女はこの男をとおもひつつおや
のあはすれどもきかでなむありけるさてこの
となりの男のもとよりかくなむ

つゝ井津のゐつゝにかけしまろかたけ
過にけらしな妹みさるまに
女かへし
くらへこしふりわけ髪もかたすきぬ
君ならすして誰かあくへき
なといひ〳〵てつゐに本意のことくあひにけり
さて年ころふるほとに女おやなくたよりなく
なるまゝにもろともにいふかひなくてあらんやは
とて河内の国高安のこほりにいきかよふ
所いてきにけりさりけれとこのもとの女あしと
おもへるけしきもなくていたしやりけれは男こと
心ありてかゝるにやあらむと思ひうたかひて前栽
の中にかくれゐて河内へいぬるかほにて見れは
この女いとよう化粧してうちなかめて
風吹は沖つ白浪たつた山
夜半
よはにや君かひとりこゆらむ

ゆらんとよみけるをきゝてかきりなくかなしとおもひて
河内へもいかすなりにけりまれまれかの高安に
きてみれははしめこそ心にくもつくりけれ
今はうちとけて手つからいひかひとりてけこのうつは
物にもりけるを見て心うかりていかすなりにけり
さりけれはかの女やまとのかたを見やりて
君かあたり見つゝをゝらんいこま山
雲なかくしそあめはふるとも
といひて見いたすにからうしてやまと人こむといへり
よろこひてまつにたひたひすきぬれは
きみこむといひし夜ことにすきぬれは
たのまぬものゝこひつゝそふる
といひけれと男すますなりにけり
むかし男かたゐなかにすみけり男宮つかへ
しにとてわかれおしみてゆきにけるまゝに三とせ
こさりけれはまちわひたりけるにいとねんころに

人にこよひあはむとちきりたりけるにこの男
きたりけりこのとあけたまへとたゝきけれとあけ
てうたをなむよみていたしたりける

あらたまのとしの三とせをまちわひて
たゝこよひこそにゐまくらすれ

といひいたしたりけれは

あつさゆみまゆみつきゆみとしをへて
わかせしかことうるはしみせよ

といひていなむとしけれは女

梓弓ひけとひかねとむかしより
心は君によりにしものを

といひけれと男かへりにけり女
いとかなしくてしりにたちておひ
ゆけとえおひつかて清水
のある所にふしにけりそこなりける
いはにおよひのちしてかきつけゝる

あひおもはてかれぬる人をとゝめかね

我身ハいまそきえはてぬめる
とかきてそこにいたつらになりにけり

廿五
むかし男有けりあはしともいはさりける女のさすか
なりけるかもとにいひやりける

古今
秋の野にさゝわけしあさの袖よりも
あはてぬる夜そひちまさりける

色このみなる女返し

古今 小町
みるめなき我身をうらとしらねはや
かれなてあまのあしたゆくくる

廿六
むかし男五条わたりなりける女を
えすなりにけることゝわひたりける人の返事に

新古今
おもほえす袖にみなとのさはくかな（一本 さき）
もろこし舟のよりしはかりに

廿七
むかし男女のもとに一夜いきて又もいかす
なりにけれは女の手あらふ所にぬきす
をうちやりてたらいのかけにみえけるを

我はかり物思ふ人は又もあらし
と思へは水の下にも有けり
となむよみけるをこさりける男たちきゝて
水口に我や見ゆらむかはつさへ
水の下にてもろ声になく

廿八
昔色このみなりける女いてていにけれは
なとてかくあふこかたみになりにけむ
水もらさしと結ひし物を

貞観十一年二月貞明親王為皇太子時高子為女御依東宮母儀号之去年
十二月廿六日誕生　高子年廿七

廿九
むかし春宮の女御の御方の花の賀にめし
あつけられたりけれは
花にあかぬなけきはいつもせしかとも
けふのこよひに似る時はなし

卅
昔男はつかなりける女のもとに
あふ事は玉の緒はかりおもほえて
つらき心のなかく見ゆらむ

丗一

むかし宮のうちにてあるこたちのつほねのまへを
わたりけるになにのあたにかおもひけむよしや
草葉よならむさか見むといふ男
罪もなき人をうけへは忘草
をのかうへにおふといふなる
といふをねたむ女もありけり

丗二

昔物いひける女にとしころありて
いにしへのしつのをたまきくりかへし
むかしを今になすよしもかな
といへりけれとなにとも思はすやありけむ

丗三

昔をとこ津の国むはらのこほりにかよひける女
このたひいきては又はこしと思へるけしきなれは男
あしへよりみちくるしほのいやましに
君に心を思ひますかな
返し
こもりえに思ふ心をいかてかは

舟さす棹のさして知るへき
ゐなか人のことにてはよしやあしや

三十四

むかし男つれなかりける人のもとに
いへはえにいはねは胸にさはかれて
心ひとつになけくころかな
おもなくていへるなるへし

三十五

昔心にもあらてたえたる人のもとに
玉のをゝあはをによりてむすへれは
たえての後もあはむとそ思ふ

三十六

昔わすれぬるなめりと問ことしける女のもとに
谷せはみ峰まてはへる玉かつら
たえむと人にわか思はなくに

三十七

むかし男色このみなりける女にあへりけり
うしろめたくや思ひけむ
我ならて下ひもとくなあさかほの
夕かけまたぬ花にはありとも

返し
ふたりしてむすひしひもをひとりして
あひみるまてはとかしとそおもふ

卅八
昔紀のありつねかりいきたるにありきて
おそくきけるによみてやりける
君によりおもひならひぬ世中の
人はこれをやこひといふらむ
返し
ならはねは世の人ことになにをかも
恋とはいふととひし我しも

卅九
むかし西院（淳和天皇）のみかとと申すみかとおはし
ましけりそのみかとのみこたかいこ（崇子内親王 母橘船子 正四位上清野女 承和十五年五月十五日薨）と申す
いまそかりけりそのみこうせ給て御はふりの
よるその宮のとなりなりける男御は
ふりみむとて女くるまにあひのりていてたり
けりいとひさしうゐていてたてまつらす

てやみぬへかりけるあひたにあめのしたのいろこのみ
源のいたるといふ人これも物見るにこの
車を女車と見てよりきてとかくなまめ
くあひたにかのいたるほたるをとりて女の
くるまにいれたりけるを車なりける人この
ほたるのともす火にやみゆらんともしけちなむ
すとてのれるおとこのよめる
いてゝいなはかきりなるへみともしけち年
へぬるかとなくこゑをきけ
かのいたるかへし
いとあはれなくそきこゆるともしけち
きゆる物ともわれはしらすな
あめのしたのいろこのみのうたにてはなをそ
ありける
いたるはしたかふかおほち也みこのほいなし

四十 昔わかきおとこけしうはあらぬ女を思ひけり

あすゐおとやあらそひしてはくとて
この女とおもへといやしきあそうのまへ
なといふもとて人のくになりけれはまくら心つきされは
あるけれはこそしつきもとしあつ女そみや
うれしと思ふにもりのみのあひさとおもへ
やまとのうちうやこの女といひつれて
かれ瀬とまかせてそしかりしかのそ給へ
かねてよりくくるしめる

いまは伊勢はされはやまとのかくしまとも
あやしなかりの宇まつくかなしも
とよんてこそいはぬものやあらそひけん
在中将にてそのむかしの伊勢とふりをあると
かならすもえつちえぬえいりてまれはまたは
く頼みて宇多のみかとのみつらにきこえ文
て文のされからのあされはしもからしして
いきつくさらけの昔の人をはかの十六也

とよみしかはいへのむすめにやりけるとや
四十一
昔女はらからふたりありけりひとりはいや
しき男のまつしきひとりはあてなる男も
たりけりいやしき男もたるしはすのつこ
もりにうへのきぬをあらひててつからはりけり
心さしはいたしけれとさるいやしきわさもならは
さりけれはうへのきぬのかたをはりやりてけり
せむかたもなくてたゝなきになきけりこれを
かのあてなる男きゝていと心くるし
かりけれはいときよらなるろうさうのうへのきぬを
見いてゝやるとて
むらさきのいろこき時はめもはるに
野なる草木そわかれさりける
むさし野の心なるへし
四十二
昔男いろこのみとしる〳〵女をあひいへりけり
されとにくゝはたあらさりけりしは〳〵いきけれ

ことなりけるにやあらむそいりくいはさえ
あの御かけ季なくてこえあつまりて
みなおほくあはれとおもひつゝ給さけるを事
あはれえ得まさりくまてなき
いそらにあまりゆめにけれとゝ
そらりとのちに今とそのさて
ものかたりになむありけるとそ
四十三
むかしかやのみこと申すみこ

一
賀陽親王 桓武第七皇子 夫人多治比氏 真宗女
貞観十三年十月八日薨 七十八
そのみこ女をおほしていとかしこくかしつきたまひけるを
時々まいりかよひける人のなにかしといひけるを
我のことおもひけるを人きゝつけてもゝ
やるかたもなく来給ひつゝ
ほかへさそひてあるひとの里のあるところに
まめならさるまてわすれものを
このこの女宮に来給へるく

名のみたつしでのたをさはけさぞなく
いほりあまたとうとまれぬれば
時はさ月になむありけるをとこかへし
いほりおほきしでのたをさはなをたのむ
わがすむ里にこゑしたえずは
四十四 むかしあがたへゆく人にむまのはなむけせむ
とてよびてうとき人にしあらざりければ家と
じさかづきさゝせて女のさうぞくかづけむ
とすあるじのをとこうたよみてものこしにゆひつけさす
いでゝゆく君がためにとぬぎつれば
我さへもなくなりぬべきかな
このうたはあるがなかにおもしろければ心と
どめてよまずはらにあぢはひて
四十五 昔男有けり人のむすめのかしづくいかでこの
をとこに物いはむと思ひけりうちいでむ事かた
くやありけむものやみになりてしぬべき時に

まとひきたりけれとしにけれはつれ〳〵とこもりをりけり時はみな月のつこもりいとあつきころほひによひはあそひをりて夜ふけてやゝすゝしき風ふきけりほたるたかくとひあかるこの男見ふせりて

ゆくほたる雲のうへまていぬへくは
秋風ふくとかりにつけこせ
くれかたき夏のひくらしなかむれは
そのこととなく物そかなしき

昔男いとうるはしき友ありけりかたときさらすあひ思ひけるを人の国へいきけるをいとあはれと思ひてわかれにけり月日へておこせたるふみにあさましくたいめんせて月日のへにける事わすれやし給ひにけむといたく思ひわひて

あひ侍世中の人の心はかはりけれは忘らるゝ
物よりあからさまに思はれしか今や
めくりあひてもすゝしくならぬ
とはれぬ事とは思ひけるか
廿七
むかし男書おくりける人にて思ひなきに
こと心ありけることをきゝてつかはしける
いひしらぬ

古今
秋風のふきとふきぬるむさしのは
なへて草はの色かはりけれ
ぬしゝらぬ

古今
ゆかぬかに色そかはれて
はかなりしいろせてあつろふ物は
廿八
昔はさこそはけさむしものかれもあせんと人
とおもふ中にはうつれて

古今
今そしるくるしき物と人またむ
さとはかよはぬ人へかりけむ

四十九

昔男いもうとのいとをかしげなるを見をりて

うらわかみねよげに見ゆるわかくさを

人のむすばん事をしぞ思ふ

ときこえけり返し

はつ草のなどめづらしき言の葉ぞ

うらなく物を思ひけるかな

五十

むかし男有けりうらむる人をうらみて

鳥の子をとをづつとをはかさぬとも

おもはぬ人をおもふものかは

といへりければ

あさ露はきえのこりてもありぬべし

たれかこの世をたのみはつべき

又をとこ

吹風にこぞのさくらはちらずとも

あなたのみがた人の心は

又女返し

行水にかすかくよりもはかなきは
思はぬ人を思ふなりけり

又おとこ
ゆく水とすくるよはひとちる花と
いつれまててふ事をきくらむ
あたくらへかたみにしける男女の
しのひありきしける事なるへし

六十一
むかしおとこ人の前栽に菊うへけるに
うへしうへは秋なき時やさかさらむ
花こそちらめねさへかれめや

六十二
昔男有けり人の許よりかさりちまきをこせたりける返事に
あやめかり君はぬまにそまとひける
我は野にいてゝかるそわひしき
とてきしをなんやりける

六十三
昔男あひかたき女にあひて物かたりなとするほとに

するほとに鳥のなきけれは
いかてかは鳥のなくらん人しれす
おもふこゝろはまたよふかきに
六十四 むかしをとこつれなかりける女にいひやりける
ゆきやらぬ夢ちをたのむたもとには
あまつそらなる露やおくらん
六十五 昔男思ひかけたる女のえうましうなりての世に
おもはすはありもすらめと事の葉の
をりふしことにたのまるゝかな
六十六 むかし男ふして思ひおきて思ひおもひあまりて
わか袖は草のいほりにあらねとも
くるれは露のやとりなりけり
六十七 昔男人しれぬ物思ひけりつれなき人の許に
恋わひぬあまのかるもにやとるてふ
我からみをもくたきつるかな
六十八 むかし心つきて色このみなる男なかをかといふ

所に家つくりてをりけりそこのとなりなりける
宮はらにこともなき女とものゐ中なりけれは
田からんとてこの男のあるを見ていみしのすき物の
しはさやとてあつまりていりきけれはこの
男にけておくにかくれにけれは女
あれにけりあはれいく世の宿なれや
すみけん人のおとつれもせぬ
といひてこの宮にあつまりきゐて
ありけれはこの男
むくらおひてあれたるやとのうれたきは
かりにもおにのすたくなりけり
とてなんいたしたりけるこの女ともほひろはん
といひけれは
うちわひておちほひろふときかませは
我も田つらにゆかまし物を
昔男京をいかゝ思ひけん東山にすまんと思入て

(拾遺)
すみわひぬ今はかきりと山さとに
身をかくすへきやともとめてむ
かくて物いたくやみてしに入たりけれは
おもてに水そゝきなとしていきいてゝ
(古今 後撰)
わかうへに露そをくなるあまの河
とわたる舟のかいのしつくか
となむいひていき出たりける
むかし男ありけり宮つかへいそかしく
心もまめならさりけるほとの家とうし
まめにおもはむといふ人につきて人の国へいにけり
此男宇佐の使にて行けるにあるくにの祗承(しそう)の
官人のめにてなむあるとききて女あるしに
かはらけとらせよさらすはのましといひけれは
かはらけとりていたしたりけるにさかな
なりけるたちはなをとりて
(古今)
五月まつ花たちはなの香をかけは

むかしの人の袖の香そする
といふをきゝておもひいてゝあまになりて山
にいりてそありける

六十一

むかし男つくしまていきたりけるにこれは
色このむといふすきものとすたれのうちなる
人のいひけるをきゝて

拾遺

そめ河をわたらむ人のいかてかは
いろになるてふ事のなからむ

女かへし

後撰

名にしおはゝあたにそあるへきたはれ島
なみのぬれきぬきるといふ也

六十二

昔としころおとつれさりける女心かしこくやあらさ
りけむはかなき人の事につきて人の国なり
ける人につかはれてもと見し人の前にいてきて
物くはせなとしけりよさりこのありつる
人たまへとあるしにいひけれはおこせたりけり

我をはしらすやとて
いにしへのにほひはいつらさくら花
こけるからともなりにけるかな
といふをいとはつかしと思ていらへもせてゐたるを
なといらへもせぬといへは涙のこほるゝに
めもみえすものもいはれすといふ
これやこの我にあふみをのかれつゝ
年月ふれとまさりかほなき
といひて衣ぬきてとらせけれとすてゝにけ
にけりいつちいぬらむともしらす
六十三
昔世こゝろつける女いかて心なさけあらむ男に
あひえてしかなとおもへといひいてむも
たよりなさにまことならぬ夢かたりをす子三人をよひて
かたりけりふたりの子はなさけなくいらへてやみぬ
さふらうなりける子なむよき御男そいてこむと
あはするにこの女けしきいとよしこと人は

なさけなしいかてこの在五中将にあはせてし
かなと思ふ心ありかりしありきけるにいき
あひて道にて馬のくちをとりてかうかう
なむ思ふといひけれはあはれかりてきてねに
けりさてのち男見えさりけれは女おとこの家に
いきてかいま見けるをおとこほのかに見て
もゝとせにひとゝせたらぬつくもかみ
我をこふらしおもかけにみゆ
とていてたつけしきをみてむはらからたちに
かゝりていゑにきてうちふせりおとこかの女の
せしやうにしのひてたてりてみれは女なけきて
ぬとて
さむしろに衣かたしきこよひもや
こひしき人にあはてのみねむ
とよみけるをおとこあはれと思ひてその夜はねにけり
世中のれいとして思ふをはおもひおもはぬをは
おもはぬ物をこの人はおもふをもおもはぬをも
けちめみせぬ心なむありける

ちめみせぬ心なんありける

昔男女をみそかにかたらふわさもせさりけれは
いつくなりけんあやしさによめる

吹風に我身をなさは玉すたれ
ひまもとめつゝ入へき物を

返し

とりとめぬ風にはありとも玉すたれ
たかゆるさはかひまもとむへき

昔おほやけおほしてつかう給ふ女のいろゆるさ
れたるありけり大御息所とていますかりける
いとこなりけり殿上にさふらひける在原
なりける男のまたいとわかゝりけるを此女あひし
りたりけり男女かたゆるされたりけれは女の有
所にきてむかひをりけれは女いとかたはなり身も
ほろひなんかくなせそといひけれは
思ふにはしのふる事そまけにける逢に

あふにしかへはさもあらはあれ
といひてさうしにおりたまへれはれいのこのみさうしには人のみるをもしらてのほりゐけれはこの女思ひわひてさとへゆくされはなにのよき事と思ひていきかよひけれはみな人きゝてわらひけりつとめてとのもりつかさのみるにくつはとりておくになけいれてのほりぬかくかたはにしつゝありわたるに身もいたつらになりぬへけれはつゐにほろひぬへしとてこの男いかにせむわかゝる心やめ給へと仏神にも申けれといやまさりにのみおほえつゝなをわりなくこひしうのみおほえけれはおむやうしかむなきよひてこひせしといふはらへの具してなむいきけるはらへけるまゝにいとゝかなしき事かすまさりてありしよりけにこひしくのみおほえけれは

古今 読人不知

恋せしとみたらし河にせしみそき
神はうけすもなりにけるかな

やといひてなむいにける
この帝はかほかたちよくおはしまして仏
の御名を御心に入て御声はいと尊くて
申給ふを聞て女はいたうなきけりかゝる
君につかうまつらですくせつたなくかなしき事
この男にほたされてとてなむなきけるかゝる程に
みかときこしめしつけてこの男をはなかし
つかはしてけれはこの女のいとこのみやす所女をは
まかてさせてくらにこめてしをり給うけれは
くらにこもりてなく

古今 典侍直子

あまのかるもにすむ虫の我からと
ねをこそなかめ世をはうらみし
となきをれはこの男は人のくにより夜ことにきつゝ
ふえをいとおもしろくふきてこゑはをかしうてそ
あはれにうたひけるかゝれはこの女はくらにこもりなから
それにそあなるとはきけとあひ

さりともと思ふらむこそかなしけれ
あるにもあらぬ身をしらすして
とおもひをり男は女しあはねはかくしありき
つゝ人の国にありきてかくうたふ
いたつらにゆきてはきぬる物ゆへに
みまくほしさにいさなはれつゝ
水の尾の御時なるへし大みやすん所もそめ
との后也五條の后とも

清和天皇鷹犬之遊漁猟之娯未嘗留意
風姿甚端厳如神性

六十六
むかし男津の国にしる所ありけるに友たちひき
ゐてなにはの方にいきけりなきさを見れは
舟とものあるを見て
難波津をけさこそみつのうらことに
これやこの世をうみわたる舟
これをあはれかりて人々かへりにけり

六十七
昔をとこせうえうしにおもふとちかいつらねて和泉
の国へきさらきはかりにいきけり河内の国
伊こま山を見れはくもりみはれみたちゐる雲
やます朝よりくもりてひるはれたり雪いとしろ
う木の末にふりたりそれを見てかの行
人の中にたゝ一人よみける

昨日けふ雲のたちまひかくろふは
花の林をうしとなりけり

六十八
むかし男いつみの国へいきけり住吉のこほり
すみよしのさとすみよしの浜をゆくにいとおもしろ
けれはおりゐつゝ行ある人すみよしの浜
とよめといふ

鴈なきて菊の花さく秋はあれと
春のうみへにすみよしの浜

とよめりけれはみな人／＼よますなりにけり

六十九
昔男ありけり其男伊勢の国にかりの使

にいきけるにかの伊勢の斎宮なりける人のおや
おやつねの使よりはこの人よくいたはれといひやれ
りければおやのことなりければいとねんころにいたはりけり
あしたにはかりにいだしたてゝやり
ゆふさりはかへりつゝそこにこさせけりかくてねんころに
いたつきけり二日といふ夜をとこわれてあはんといふ
女もはたいとあはじともおもへらずされと
人めしげゝればえあはず使ざねとある
人なればとをくもやどさず女のねやもちかくありければ
女人をしづめてねひとつばかりにをとこのもとに
きたりけりをとこはたねられざりければ
外のかたを見いだしてふせるに月のおぼろなるに
ちいさきわらはをさきにたてゝ人たてりをとこいとうれしくて
わがぬる所にゐていりてねひとつよりうしみつ
まであるにまだなにごともかたらはぬに
かへりにけりをとこいとかなしくてねずなりにけり

なりにけりつとめていふかしけれとわか人を
やるへきにしあらねはいと心もとなくてまちをれは
あけはなれてしはしあるに女のもとより詞は
なくて

古今
君やこし我やゆきけむおもほえす
夢かうつゝかねてかさめてか
男いといたうなきてよめる

古今
かきくらす心のやみにまとひにき
夢うつゝとはこよひ（一説よひと）さためよ

とよみてやりてかりにいてぬ野にありけと心は
そらにてこよひたに人しつめていととくあはむ
と思ふに国のかみいつきの宮のかみかけたる
かりのつかひありときゝて夜ひとよさけのみし
けれはもはらあひこともえせてあけはおはり
の国へたちなむとすれは男も人しれすちの
涙をなかせとえあはす夜やうやうあけなむと

するほとに女かたよりいたすさかつきのさらに哥を
かきて出したりとりて見れは
かち人のわたれとぬれぬえにしあれは
とかきて末はなしそのさかつきのさらに
ついまつのすみして哥の末をかきつく
又あふさかの関はこえなむ
とてあくれはおはりの国へこえにけり斎宮は
水の尾の御時文徳天皇の御むすめ（恬子内親王）
これたかのみこのいもうと

七十
昔男かりのつかひよりかへりきけるにおほよとの
わたりにやとりていつきの宮のわらはへにいひかけゝる
みるめかる方やいつこそさをさして
（わらへ）我にをしへよあまのつり舟

七十一
むかし男伊勢の斎宮に内の御つかひにてま
いれりけれはかの宮にすき事いひける女
わたくし事にて

拾遺 人丸
ちはやふる神のいかきもこえぬへし
おほみや人の見まくほしさに
返し
恋しくはきてもみよかしちはやふる
神のいさむる道ならなくに

七十二
むかし男いせの国なりける女又えあはて
隣の国へいくとていみしう恨みけれは女
おほよとの松はつらくもあらなくに
うらみてのみもかへる浪かな

七十三
昔そこにはありときけとせうそこをたに
いふへくもあらぬ女のあたりを思ひける
めには見て手にはとられぬ月のうちの
かつらのことき君にそありける

七十四
むかし男女をいたう恨て
一百 拾遺
岩ねふみかさなる山にあらねとも（へたてね 拾遺 イ）
あはぬ日おほくこひわたるかな

昔男伊勢の国にゐていきてあらんといひけれは女

おほよとの浜におふてふみるからに心はなきぬかたらはねとも

といひてましてつれなかりけれはおとこ

袖ぬれてあまのかりほすわたつ海のみるをあふにてやまんとやする

女

岩間よりおふるみるめしつれなくはしほひしほみちかひもありなん

又おとこ

涙にそぬれつゝしほる世の人のつらき心は袖のしつくか

世にあふことかたき女になん

むかし二条の后のまた春宮のみやすん所と申ける時氏神にまうて給ひけるに近衛つかさにさふらひける翁人々のろくたまはるついてに御車より

くるまよりたまはりてよみてたてまつりける

冬

大原やをしほの山もけふこそは
神世のこともおもひいつらめ
とて心にもかなしとや思ひけむいかゝ思ひけむ
しらすかし

むかし田むらの（文徳天皇）みかとゝ申すみかとおはしましけり
その時の女御たかきこと申すいまそかりけり
それうせ給ひて安祥寺にてみわさしけり人
ゝさゝけ物たてまつりけりたてまつりあつめたる
もの千さゝけはかりありそこはくのさゝけ
物を木の枝につけて堂のまへにたてたれは山も
さらに堂のまへにうこきいてたるやうになむ
見えけるそれを右大将にいまそかりける藤原
の常行と申すいまそかりて講のをはるほとに
うたよむ人ゝをめしあつめてけふのみわさを題
にて春の心はえあるうたたてまつらせ給ふ右のむま

おきなめはたかひなからよみける
山のみなうつりてけふにあふことは
春のわかれをとふとなるへし
とよみたりけるを今見れはよくもあらさり
けりそのかみはこれやまさりけんあはれかりけり

西三条 右大臣 良相 一男

女御従四位下藤多賀幾子 右大臣良相女 嘉祥三年女御 天安二年十一月十四日卒
安祥寺 五條后順子建立寺也
常行 貞観六年正月十六日参議 八年十二月十六日右大将 卅一 薨卒 貞観十七年二月十七日頓
天安卒 女御被行事之間 右大将若後延喜頃

七八

むかし多かきこと申女御おはしましけり
うせ給ひてなゝなぬかのみわさ安祥寺にてしけり
右大将藤原の常行といふ人いまそかりけり
そのみわさにまうて給ひてかへさに山しなの
禅師のみこおはします其山しなの宮に
たきおとし水はしらせなとしておもしろく
つくられたるにまうて給うて年ころよそには
つかうまつれとちかくはいまたつかうまつらす
こよひはこゝにさふらはんと申給ふ

やましなのせむしのみこのおましのまうけせさせ給ふ
人康親王 仁明第四皇子 山科宮 貞観元年五月入道 [illegible]
けりさるにかの大将いてゝたはかり給ふやう
宮つかへのはしめにたゝなほやはあるへき三條の大
みゆきせし時きのくにの千里のはまに
ありけるいとおもしろきいしたてまつれりき
おほみゆきの後
貞観八年三月廿三日 于時大将
良相 百花亭
たてまつれりしかはある人のみさうしの
まへのみそにすゑたりしをしまこのみ給君なりこの
いしをたてまつらむとのたまひてみすいしん
とねりしてとりにつかはすいくはくもなくて
もてきぬこの石きゝしよりは見るはまされり
これをたゝにたてまつらはすゝろなるへしとて人〻
に哥よませ給みきのむまのかみなりける人のを
なむあをきこけをきさみてまきゑの
かたにこの哥をつけてたてまつりける

あかねどもいはにぞかふるいろ見えぬ
心を見せんよしのなければ
となむよめりける

七十九

むかし氏のなかにみこうまれ給へりけり
御うぶやに人々うたよみけり御おほぢ
がたなりけるおきなのよめる

一 我門に千尋あるかげを植つれば
夏冬たれかかくれざるべき

八十

これは貞数のみこ時の人中将の子と
なんいひけるあにの中納言行平のむすめのはらなり

貞数親王 清和第八 母中納言行平女 延喜十三年薨 四十二

昔おとろへたる家に藤花うへたる人あ
りけりやよひのつごもりにその日あめそほふるに
人のもとへおりてたてまつらすとてよめる

古今

ぬれつゝぞしゐておりつる年の内に
春はいくかもあらじと思へば

十

源融　嵯峨帝十二源氏　母正五位下大原全子　貞観十四年八月廿五日任左大臣元大納言　[illegible]仁和三年従一位寛平元年輦車　七年八月薨　七十三

むかし左のおほいまうちきみいまそかりけり
加茂河のほとりに六条わたりに家をいとおもしろく
作りてすみ給ひけり神無月のつこもりかた
きくの花うつろひさかりなるにもみち
のちくさにみゆるおりみこたちおはしまさせて
夜ひとよさけのみしあそひて夜あけもて
ゆくほとにこの殿のおもしろきをほむるうた
よむそこにありけるかたゐおきなたいしきの
したにはひありきて人にみなよませはて
てよめる

しほかまにいつかきにけむあさなきに
つりするふねはここによらなむ

となむよみけるはみちのくにゝいきたりけるに
あやしくおもしろき所々おほかりけり
わかみかと六十余国の中にしほかまといふ

所に似たる所なかりけりされはなむかの
おきなさらにこゝをめてゝしほかまにいつかきにけむと
よめりける

八十二

むかし惟喬のみこと申すみこおはしまし
（惟喬　文徳第一　母従五位上紀静子名虎女　四品号小野宮）
けり山さきのあなたに水無瀬といふ所にみや
ありけり年ことの桜の花さかりにはその
宮へなむおはしましけるその時右のむまのかみなり
ける人をつねにゐておはしましけり時
世へて久しくなりにけれはその人の名わすれ
にけりかりはねむころにもせてさけをのみ
のみつゝやまとうたにかゝれりけりいまかりする
かたのゝなきさの家その院のさくらことにおもしろし
その木のもとにおりゐて枝をおりてかさしにさして
かみなかしもみな歌よみけり馬のかみなりける
人のよめる

古今
世中にたえてさくらのなかりせは春の

昔のこゝろ人のうちに帝王もおはしまし
こそもしみえぬらんか又人のこゝろく
ちりまかはくそいのて桜をめてさせ
られ世りすみか久しかる宋
とくその本のよはそちくか為かよ日く
もろこしなりぬ清とてなる人さけとまよせ
野とらいむきことのなり紙のとてむ
とてしれ所織りよめ中にあるの河と
いま所にてらぬみてはむかしの見ぬかみさ
わいる見てつゝ本のかさ野とりてあ
まれ河のけるかに淳なる頭かんらし見
こゝ河の月とさせてつきまする也し流むさ
の見りもてそこくみつきの

古今

おりくるしたゝかく河めにや小とまさむ
おほのの河原に我たきつかなる
みこうとせてらしぬまつんめてこえたつさ

給はすきのありつね御ともにつかうまつれ
りそれかへし

ひとゝせにひとたひきます君まては
やとかす人もあらしとそ思ふ

かへりて宮にいらせ給ひぬ夜ふくるまてさけ
のみ物かたりしてあるしのみこゑひていり
給ひなむとす十一日の月もかくれなむとすれは
かのむまのかみのよめる

あかなくにまたきも月のかくるゝか
山のはにけていれすもあらなむ

みこにかはりたてまつりてきのありつね

おしなへてみねもたひらになりなゝむ
山のはなくは月もいらしを

八十三

昔みなせにかよひ給ひしこれたかのみこ
れいのかりしにおはします供にむまのかみなるおきな
つかうまつれり日ころへて宮にかへり給

宮にかへりたまうけり御をくりしてとくいなんと思に大み
きたまひろくたまはんとてつかはさゞりけり
この馬のかみ心もとなかりて
枕とて草ひきむすぶ事もせじ
秋の夜とだにたのまれなくに
とよみける時はやよひのつごもりなりけり
みこおほとのごもらであかし給うてけり
かくしつゝまうでつかうまつりけるを思ひの
ほかに御ぐしおろし給うてけり むつきに
貞観十四年七月剃髪
をがみたてまつらむとて小野にまうでたるに
ひえの山のふもとなれば雪いとたかし
しゐて御むろにまうでゝおがみたてまつるに
つれづれといと物がなしくておはしましければやゝ久
しくさぶらひていにしへの事など思ひいで
きこえけりさてもさぶらひてしがなと思へど
おほやけ事どもありければえさぶらはで

夕くれにかへるとて
忘れては夢かとそ思ふおもひきや
雪ふみわけて君を見むとは
とてなむなくなく来にける

八十四

昔男有けり身はいやしなから母なむ宮
なりける其母なかをかといふ所に
すみ給ひけり子は京に宮仕へしけれは
まうつとしけれとしはしはえまうてす
ひとつ子にさへありけれはいとかなしうし給ひけり
さるにしはすはかりにとみの事とて御文あり
おとろきて見れは歌あり

古今
老ぬれはさらぬ別のありといへは
いよいよ見まくほしき君かな
伊豆内親王 貞観三年九月薨

かの子いたくうちなきてよめる

古今
世中にさらぬ別のなくもかな
千代もといのる人の子のため

八十五

むかし男有けりわらはよりつかうまつりける君御くし
おろし給うてけりむ月にはかならす
まうてけりおほやけの宮つかへし
けれはつねにはえまうてすされともとの
心をうしなはてまうてけるになん有ける
むかしつかうまつりし人そくなるせんしなるあまた
まいりあつまりてむ月なれはことたつとて大御
みき給ひけり雪こほすかことふりてひねもすに
やますみな人ゑひて雪にふりこめられたり
といふを題にて哥ありけり

萬初二句　古今

おもへとも身をしわけねはめかれせぬ
雪のつもるそわかこゝろなる
とよめりけれはみこいといたうあはれかり給ひて
御そぬきてたまへりけり

八十六

むかしいとわかき男わかき女をあひいへり
けりをの〃〃おやありけれはつゝみていひ

はしくやみにけりとしへて女のもとになを心
さしはたさむとやおもひけむおとこうたをよみ
てやれりけれ
今まてに忘れぬ人はよにもあらし
をのかさまさま年のへぬれは
とてやみにけりおとこも女もあひはなれぬ
宮つかへになむいてにける
昔男津の国むはらのこほりあしやのさとに
しるよしゝていきてすみけりむかしの歌に
あしのやのなたのしほやきいとまなみ
つけのをくしもさゝすきにけり
とよみけるそこのさとをよみける
こゝをなむあしやのなたとはいひける
このおとこなまみやつかへしけれはそれ
をたよりにてゑふのすけともあつまり
きにけりこのおとこのこのかみも衛府督
なりけりその家のまへの海のほとりにあ

そびありきていざこの山のかみにありといふ
ぬのびきのたきみにのぼらむといひてのぼ
りてみるにそのたき物よりことなりながさ二
十丈ひろさ五丈ばかりなるいしのおもてにしら
きぬにいはをつゝめらんやうになむありけるさる滝
のかみにわらうだのおほきさしてさしいでたるいし
ありそのいしのうへにはしりかゝる水は
せうかうじくりのおほきさにてこぼれおつそ
こなる人にみな滝の歌よます かのゑふのかみ
まづよむ

わが世をばけふかあすかとまつかひの
なみだの滝といづれたかけん
あるじつぎによむ
ぬきみだる人こそあるらし白玉の
まなくもちるか袖のせばきに
とよめりければかたへの人わらふ事にやありけん

このうたにめてゝやみにけりかへりくるみちとをくて
うせにし宮内卿もちよしか家の
まへくるに日くれぬやとりのかたをみやれは
あまのいさり火おほくみゆるにかのあるしの男よむ
　はるゝ夜のほしか河邊のほたるかも
新古今　わかすむかたのあまのたく火か
とよみて家にかへりきぬその夜みなみの風
ふきて浪いとたかしつとめてその家のめ
のこともいてゝうきみるのなみによせられたる
ひろひて家のうちにもてきぬ女かたよりその
みるをたかつきにもりてかしはをおほひて
いたしたるかしはにかけり
　渡津海のかさしにさすといはふもゝ
　きみかためにはをしまさりけり
井なか人の哥にてはあまれりやたらすや
八十八
昔いとわかきにはあらぬこれかれ友たちとも

あつまりて月をみてそれかなかにひとり
古今 おほかたは月をもめてしこれそこの
つもれは人の老となるもの
八十九 むかしいやしからぬおとこ我よりはまさり
たる人を思ひかけて年へける
人しれす我こひしなはあちきなく
いつれの神になき名おほせむ
九十 昔つれなき人をいかてと思ひわたりけれは
あはれとや思ひけむさらはあす物こしにても
といへりけるをかきりなくうれしく又
うたかはしかりけれはおもしろかりける
桜につけて さくら花けふこそかくもにほふとも
あな頼みかたあすの夜のこと
といふ心はへもあるへし
九十一 昔月日のゆくをさへなけく男三月つこもり
かたに

九十一

をしめとも春のかきりのけふの日の
ゆふくれにさへなりにけるかな

九十二

むかしこひしさにきつゝかへれと女にせうそこ
をたにえせてよめる

あしへこく棚なしをふねいくそたひ
ゆきかへるらんしる人もなみ

九十三

昔男身はいやしくていとになき人を思ひ
かけたりけりすこしたのみぬへきさまにや
ありけんふして思ひおきて思ひ思ひわひて
よめる

あふなあふな思ひはすへしなそへなく
たかきいやしきくるしかりけり

むかしもかゝる事は世のことはりにやありけむ

九十四

昔男ありけりいかゝありけん其男すます
なりにけり後に男有けれと子ある中なりけれ
はこまかにこそあらねと時々物いひおこせけり女
かたにゑかく人なりけれはかきにやれりける

やれりけるを今の男のものすとてひとひふつかおこせ
さりけりかの男いとつらくおのかきこゆる事
をは今まてたまはねはことはりとおもへと猶
人をはうらみつへき物になんありけるとて
ろうしてよみてやれりける時は秋になんありける

秋の夜は春日わするゝものなれや
かすみにきりや千へまさるらん

となんよめりける女返し

千ゝの秋ひとつの春にむかはめや
もみちも花もともにこそちれ

むかし二条の后につかうまつる男ありけり女
のつかうまつるをつねに見かはしてよはひわたりけり
いかて物こしに対面しておほつかなく思ひ
つめたる事すこしはるかさんといひけれは女いと
しのひて物こしにあひにけり物かたりなとして男

ひこほしにこひはまさりぬあまの河

天の河へたつる関をいまはやめてよ
この歌にめてゝあひにけり
昔男ありけり女をとかくいふ事月日へにけり
いは木にしあらねは心くるしとや思ひけむやう〳〵
あはれと思ひけりそのころみな月のもちはかり
なりけれは女身にかさひとつふたついてきにけり
女いひおこせたる今はなにの心もなし身にかさも
ひとつふたついてたり時もいとあつし少し秋
風ふきたちなん時かならすあはむといへりけり
秋まつころほひにこゝかしこよりその人のもとへ
いなんすなりとてくせちいてきにけりされは
女のせうとにはかにむかへにきたりされは此女
かへてのはつもみちをひろはせて歌をよみて
かきつけておこせたり
秋かけていひしなからもあらなくに
このはふりしくえにこそ有けれ

わかきことにくかくこしら人とせたる風や松そ
みなそやつめのはなしふまてら次よくて
やおんはなてやおもひつかし所をさしてかの
思はあまれはつくとうちそらんのろひさるな
むくはまれ事人のろのとはは物よ語
らんはおねとのやあらしとをへるなうまと家

九十七

昔わかみのはかいまらに君とはすやそ為　昭宣公 基経 貞観十四年八月廿五日 右大臣 左大将 廿七

四十の賀九条の家にてせられける日中将なりける翁　貞観十七年

よめる　業平朝臣　業平 某年 任中将 不審

古今

さくら花ちりかひくもれ老らくの
こむといふなるみちまかふかに

忠仁公　天安元年二月太政大臣 五十五 四月九日従一位 二年十一月摂政 清和外祖

九十八

むかしみきさかりはいまも見人まちにゆかはなし
さりはなのまへおもふ月つかに梅のはなそれ枝
こきてとりそてそてくまつなきく

古今　太政大臣 ゆうもし

わかそのむ君かためにぬれりて打のむれそ

ときしもわかぬ物にそありける
とよみてたてまつりたりけれはいとかしこく
をかしかり給ひて使に禄給へりけり

九十九

むかし右近の馬場のひをりの日むかひにたてたり
業平貞観六年三月右少将七年右馬頭十九年正月左中将
ける車に女のかほのしたすたれより
ほのかに見えけれは中将なりける男のよみてやりける
見すもあらす見もせぬ人の恋しくは
あやなくけふやなかめくらさむ
かへし
しるしらぬなにかあやなくわきていはん
おもひのみこそしるへなりけれ
のちはたれとしりにけり

百

昔男後涼殿のはさまをわたりけれはあるやんこと
なき人の御つほねより忘草を忍草と
やいふとていたさせ給へりけれは
忘草おふるのへとは見るらめと

こは志のふなりのちもたのまむ

むかし左兵衛督なりける在原のゆきひら
といふありけり。その人の家によき酒あり
とききて上にありける左中弁ふちはら
（藤原良近　貞観十二年正月右中弁　十六年時左中弁）
のまさちかといふをなむまらうとさねにて
その日はあるしまうけしたりける。なさけある
人にて瓶に花をさせり。その花のなかに
あやしき藤の花ありけり。花のしなひ三尺
六寸はかりなむありける。それを題にてよむ。
よみはてかたにあるしのはらからなるあるし
しけるをききて来りけれはとらへてよませ
けるもとより哥のことはしらさりけれは
すまひけれとしひてよませけれはかくなむ

さく花のしたにかくるる人をおほみ
ありしにまさるふちのかけかも

なとかくしもよむといひけれはおほきおとの

ゑい花のさかりにみまそかりて藤氏のことに
さかゆるを思ひてよめるとなむいひける
みな人そしらすなりにけり

百二

昔男有けり歌はよまさりけれと世中を思ひ
しりたりけりあてなる女のあまになりて
世中を思ひうんして京にもあらすはるかなる
山さとにすみけりもとしそくなりけれはよみて
やりける

そむくとて雲にはのらぬものなれと
世のうき事そよそになるてふ

となんいひやりける斎宮のみやなり

百三

昔男ありけりいとまめにしちようにてあた
なる心なかりけり深草のみかとになん
つかうまつりける心あやまりやしたりけん
みこたちのつかひ給ける人をあひいへりけりさて

古今

ねぬる夜の夢をはかなみまとろめは

いやはかなにもなりまさるかな
となむよみてやりけるさる歌のきたなけさよ
百四 昔ことなる事なくてあまになれる人ありけり
かたちをやつしたれど物やゆかしかりけむかもの
まつり見にいでたりけるを男うたよみてやる
世をうみのあまとし人を見るからに
めくはせよともたのまるゝかなこれ
は斎宮の物見給ひける車にかくきこえたりけれハ
見さしてかへり給ひにけりとなむ
百五 昔男かくては死ぬべしといひやりたりけれハ女
白露はけなばけななむきえずとて
玉にぬく人もあらじものゆへ
といへりけれハいとなめしと思ひけれど心ざし
はいやまさりけり
百六 昔男みこたちのせうえうし給ふ所にまうでゝ
たつた河のほとりにて

ちはやふる神代もきかすたつた河
からくれなゐに水くゝるとは
むかしあてなる男ありけりその男のもとなりける
人を内記にありける藤原のとし行といふ人（敏行母紀名虎女）
よはひけりされとまたわかけれはふみもをさ
をさしからすことはもいひしらすいはむや歌はよま
さりけれはかのあるしなる人あむをかきてかゝせて
やりけりめてまとひにけりさておとこのよめる

つれ〳〵のなかめにまさる涙河
袖のみひちてあふよしもなし
返しれいのおとこ女にかはりて
あさみこそ袖はひつらめ涙河
身さへなかるときかはたのまむ
といへりけれはおとこいといたうめてゝ今まてまき
てふはこにいれてありとなむいふなるおとこふみ
おこせたりえてのちの事なりけり雨のふり

めくるよむとはいひしかみさいはらぬにこれ
聞之布しやうき物に生のかたし女かりか
くりくしみえてやう涙
かすくしおしいひとられとひとくみ
身と我あはうそ行ね家
とみえくやわり着衣を消てわすれうあへく
志つにに我まてましいきて侍る
百八 むかし女人若衣とうしみえく
風布宇はこ子浪と寄津し王孫や
わか夜くはるはるとされ事哉
わつ揚もくいひと紙書て給ふ男
秋井しま津のあまこあく国よる
水よ絶えさ阿史い布り梯と
百九 昔男女人とうるさ侍りやらう
花もまのなくあさにたりし字れ
いつまとはきこひん也うみ

百十

むかし男みそかにかよふ女ありけりそれかもとより
こよひ夢になむみえ給つるといへりけれはおとこ
おもひあまりいてにしたまのあるならむ
夜ふかくみえはたまむすひせよ

百十一

昔男やむことなき女のもとになくなりにけるを
とふらふやうにていひやりける
いにしへはありもやしけむ今そしる
またみぬ人をこふるものとは

かへし

後撰
したひものしるしとするもとけなくに
かたるかことはこひすそあるへき

又かへし

後撰
こひしとはさらにもいはしした紐の
とけむを人はそれとしらなん

百十二

むかし男ねむころにいひちきりける女の
ことさまになりにけれは

すまのあまのしほやく煙風をいたみ
おもはぬかたにたなひきにけり
百十三 昔男やもめにてゐて
なかゝらぬ命のほとにわするゝは
いかにみしかき心なるらん
百十四 昔仁和のみかとせり河に行幸し給ひける時
或本不有也しこゝし 多本皆載之不可止
いまはさる事にけなく思ひけれと もとつきにける
事なれは大鷹のたかゝひにてさふらはせ給ひ
けるすりかりきぬのたもとにかきつけゝる
おきなさひ人なとかめそかりころも
けふはかりとそたつもなくなる
おほやけの御けしきあしかりけりおのか
よはひを思ひけれとわかゝらぬ人はきゝおひけりとや
百十五 昔みちの国にて男女すみけり男京へ
いなんといふこの女いとかなしうて馬のはなむけ
をたにせんとておきのゐて宮こしまといふ所にて

さけりは風てありけれ

参議雅経

かはのゝくもやくらきに松ふかく
宮こしも浦へのかつ見えわたり

百十六

むかしおもふことは絶えみちの國まてもいつくを
里宮に松はふ人はとひやせむ

浪まよりみゆるこしまの濱ひさき
ひさしくなりぬ君にあはすて

たますたれあさまのあかりまちしやらむ

百十七

昔みし十かへりまての小松年へにけりな

我見てもひさしくなりぬ住吉の
きしの姫松いく世へぬらむ
あら人神宮さやうし行て

むつましと君はしら浪みつかきの
ひさしき代よりいはひそめてき

百十八

むかしより久しくなりぬきしの松いくとせま
いりえにもいつかきぬらむ

玉かつらはふ木あまたになりぬれは
たえぬこゝろのうれしけもなし

むかし女のあたなる男のかたみとて
をきたる物ともを見て
かたみこそ今はあたなれこれなくは
わするゝ時もあらましものを

むかしおとこ女のまた世へすとおほえたる
人忍ひてもの聞えてのちほとへて
あふみなるつくまのまつりとくせなむ
つれなき人のなへのかす見む

むかし男梅壺より雨にぬれて人のまかりいつる
を見て
うくひすの花をぬふてふかさもかな
ぬるめる人にきせてかへさむ
返し
鶯の花をぬふてふ笠はいな

おもひをつけよほしてかへさむ

百廿二 むかし男ちきれる事あやまれる人に
山しろのゐての玉水手にむすひ
たのみしかひもなき世なりけり
（○といひやれといらへもせす）

百廿三 昔男有けり深草にすみける女をやう〳〵あ
きかたにや思ひけんかゝる哥をよみける
年をへてすみこし里を出ていなは
いとゝ深草野とやなりなん

女返し
野とならはうつらとなりてなきをらむ
かりにたにやは君はこさらむ
とよめりけるにめてゝゆかむと思ふ心
なくなりにけり

百廿四 むかし男いかなりける事を思ひけるおりにかよめる
おもふ事いはてそたゝにやみぬへき
我とひとしき人しなけれは

ひとはまけるくらゐ地をしめく
みわたし宇佐
深井は福さら成稲てさうふ
またのふ宇ぬきは福見は阿みら城

業平朝臣

三品弾正尹阿保親王五男 平城天皇之子
母伊登内親王 桓武第八皇女 母藤原南子

年月日 任左近将監

承和十四年正月補蔵人 嘉祥二年正月七日従五位下 貞観四年正月七日従五位上
五年二月十日左兵衛権佐 六年三月八日右近少将 七年三月九日右馬頭 十一年正月七日正五位下
十五年正月七日従四位下 元慶元年正月十五日左近権中将 十二月廿一日従四位上 二年正月十一日
相模権守 三年十月蔵人頭 四年正月廿日美濃権守 同廿八日卒

親王

平城第三 母正五位下
承和九年十月薨 贈一品

行平卿

阿保親王一男

天長三年 仲平 行平 守平 業平 賜姓在原朝臣 承和七年正月蔵人 十二月辞退 廿日従五位下
十年二月侍従 十三年正月従五位上 任左兵衛佐 五月右近少将 仁寿三年正五下 斉衡二年正月
四位 因幡守 四年兵部大輔 天安二年二月中務大輔 四月左馬頭 三年正月播磨守 貞観
二年六月内匠頭 八月廿六日左京大夫 四年正月信乃守 同月従四上 五年二月大蔵大輔
正月十六日備前権守 三月八日左兵衛督 八年正月正四位下 十年五月兼備中守 貞観
十二年二月十三日参議 年五十三 廿六日左兵衛督 十四年左衛門督 十五年従三位 太宰帥 元
慶元年治部卿 六年正月中納言 六十八年正三位民部卿 仁和元年按察 仁和三年四月致仕
寛平五年薨

紀有常

承和十一年正月十一日右兵衛大尉 嘉祥三年四月二日左近将監 四月蔵人 五月十七日五位
近江権大掾 仁寿元年 七月廿六日兼左馬助 十一月甲子従五位下 二年二月廿八日
但馬介 三年正月十六日右兵衛佐 四年正月十六日兼讃岐介 将左兵衛権佐 斉衡二年
正月従五位上 同十五日左近少将 天安元年九月廿七日兼少納言 二年二月五日兼肥後

権守貞観七年三月九日任刑部権大輔九年二月十一日任下野権守十四年正月十一日
正五位下十七年二月十七日任雅楽頭十八年正月七日従四位下十九年正月廿三日卒　年六十三

二條后

中納言左兵衛督贈太政大臣長良女　母紀伊守総継女
貞観八年十二月女御　宣旨九年正月八日正五位下
貞観元年十一月廿日従五位下五節舞妓貞観十年十二月廿六日生第一皇子　廿七　帝御年十九
十一年二月一日為皇太子十三年正月八日従三位元慶元年正月三日即位日立后中宮　廿六
六年正月七日為皇太后宮　寛平八年九月廿二日停后位　延喜十年十二月薨　六十九
天慶六年五月追復后位

河原左大臣融

嵯峨第十二源氏
承和五年十一月廿七日正四位下　元服日　六年閏正月七日侍従八年正月相模守九年九
月之亥　近江守十五年二月右近中将兼美作守嘉祥三年正月七日従三位五月右衛
門督仁寿四年八月兼伊勢守斉衡三年九月任参議兼門督伊勢守如元

あま[illegible]
古今集第十六
[illegible]
月夜也
[illegible]

六歌仙

[illegible]
[illegible]

宋玉神女賦
素(モトヨリ)質(ニ)幹(シテ)之醲實(ナル)兮志解泰(ニシテ)而體閑(テイ・ミヤビカナリ)

瓌姿艶逸ニシテ儀静ニ體閑ナリ

みやひとハ風ひか也といふ詞

其心尤やさしくかすかなるをいふてなまめけと

いふ同心事欤

天福二年正月廿日己未申剋凌

桑門之盲目連日風雪之中遂此書

写為授鍾愛之孫女也同廿二日授了